

医学研究室配属 VI

科目責任者 矢澤 卓也 (病理学)

学年・学期 6 学年・通年

I. 前 文

医学教育において、従来の講義形式による一方的な知識の伝達ではなく、学生の側が能動的に参加できる授業の形態として、いくつかの方式が試みられている。また平成21年に取りまとめられた「臨床研修制度の見直し等を踏まえた医学教育の改善について」(文部科学省)では、“基礎と臨床の有機的連携により、進展著しい生命科学や医療技術の成果について生涯を通じて学び、常に自らの診断・治療技術等を検証し磨き続け、日々の診療の中で患者や疾患の分析から病因や病態を解明するなどの研究マインドを涵養する”ための方略として、研究室配属を推進することが提唱された。この「科学的探究 (Research)」は、令和4年度に改定された医学教育モデル・コアカリキュラム内において、医師として求められている基本的な資質・能力の一つとして明確に唱えられている。本選択科目では、各研究室で研究の進め方等を学ぶことにより科学的思考力を身に付け、現代の医療をもってしても未だ治療の困難な疾患に対し「科学的に」挑戦する開拓的医師となる基礎作りを目指す。

II. 受入可能人数

各配属研究室での受入可能人数による。研究課題および担当教員については後日発表し、各担当教員への配属希望を申し出、研究課題について話し合ったのちに、教務課に配属希望研究室を申し出る。なお、医学研究室配属への参画は随時受け付けている。

III. 担当教員

基本医学・基礎医学・先端医科学研究センター・臨床医学の教員。

IV. 学習内容

配属を受け入れた教員が行なっている研究に参加する。

本科目では、研究への参加を通じ、円滑な研究遂行には他の研究者との協力関係が重要であることや、研究内容については守秘義務が存在することも学ぶことになる。この経験を通じ、座学・実習で学んできた事柄と研究の最前線で繰り広げられている事柄を有機的に結びつけることができ、他者との協調性、研究におけるプライオリティーの重要性についての認識が涵養される。

V. 学修の到達目標

- ・実際に行われている研究に触れることにより、実験の基本操作ができる。
これにより、将来の大学院進学において極めて有利なスキルを身につけることになる。
- ・疾患について、より広く深く理解できる。
- ・リサーチマインドを持つきっかけとなり、能動的学修の重要性が理解できる。
- ・医師、研究者にとって極めて重要である協調性、守秘義務遵守の重要性を身につけることができる。

VI. 成績評価の方法・基準

出席状況、配属先から提示された課題の達成度、勉強会やセミナー等への参加状況などを参考に、各配属先の指導教員が評価する。

VII. 教科書・参考図書・AV資料

「ここからはじめる研究入門 - 医療をこころざすあなたへ」Stuart Porter 著、武田裕子訳。医学書院。

「医系 流れがわかる研究トレーニング How To」佐藤雅昭、草場鉄周、富塚太郎著。メディカルレビュー社。

その他、各配属先の研究室で推奨された図書や文献など。

VIII. 質問への対応方法

その都度行う。

IX. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間 * () 内はそれに必要な時間の目安

事前学習：指導を受けている教員から出される研究途中での問題点について検索する。(30分)

事後学習：実験結果をノートにまとめる。(30分)

X. コアカリ記号・番号

医学教育モデル・コアカリキュラム（平成28年度改訂版）A-8, A-2

XI. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

実験結果について教員とのディスカッションを行うことにより、その都度フィードバックされる。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	◎
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	◎
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	◎
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	◎
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	◎
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	◎
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	◎
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	◎